

WEST LIFE

令和7年11月7日(金)

校長の目



1年生の数学の授業は平面図形でした。本時の問題は、正方形の対角線及び対角の軸を引くと8つの合同な直角二等辺三角形ができるますが、これを対角線の交点Oを中心に回転させたときに、どのようなことが言えるかを調べていきます。教科書には、もちろん図があるので、生徒の多くは図を手掛かりに考えていきます。中学校の初等幾何でよく出てくる条件と言えば、「点Oを中心に回転させると…」とか「点PがAからBへ動くとき…」など、図形を動的に見て考える問題が多くなります。数学を苦手とする生徒は、「なんで動くのよ～」と悲しくなるようです。気持ちはよくわかります。



数学の授業では、学び合いを取り入れています。本時も、早くできた生徒が歩き回って、手が止まっている生徒の求めに応じてアドバイスしていました。友達なら気軽に教えてもらえる、また友達にうまく説明することで自分の理解がより深まる等、学び合いは双方のwin-winとなる学習形態の一つです。

3年生の国語の授業は万葉集でした。スクリーンには、万葉集最後の一旬が映し出されています。

新しき 年の初めの初春の 今日降る雪の いやしけ吉事

これは万葉集を編纂した大伴家持の歌です。「いやしけ」とは、重なっていくという意味。新年に降り積もる雪を見て、このように今年も良いことが重なっていくといいなあ、という気持ちを詠んでいます。大伴家は、天皇家とも近く、仏教の興隆に貢献し、壬申の乱でも活躍した名門の一族です。大伴家持は、奈良時代末期の公卿・歌人。その人生は、昇進と左遷を繰り返しました。上記の短歌は、家持が41歳のときに詠んだ歌で、これを最後に歌を詠まなくなります。平安時代が近くなり、藤原家の台頭を横目に見ながら、大伴家の没落を受け入れていきます。家持は67歳で陸奥の国（現在の青森県）においてその生涯を閉じることになりますが、晩年は、まさに斜陽でした。そう思うと、最後に詠んだこの短歌は、どこか切なく、儂さを感じます。



学年担任制3日目。振休等があったため、授業日数は少なかったのですが、今日で第1ターンが終了です。来週月曜日からは、また違う担任になります。1年生の給食の様子を見に行くと、いつものように談笑しながら食べていました。「いつも違う先生と一緒に給食を吃るのはどう？」と尋ねると、「美味しいです！」「気分が変わっています！」という声が聞かれました。生徒たちも、環境の変化を前向きにとらえて楽しんでいるようです。

